嬉泉の新聞

嬉泉の新聞　第67号　2011年（平成23年）9月発行
発行所＝社会福祉法人嬉泉
東京都世田谷区船橋1－30－9（〒156-0055）　TEL 03-3426-2323
http://www.kisenfukushi.com　E-mail：kisen@kisenfukushi.com
発行人＝石井 哲夫　　編集人＝佐瀬 美穂

道連れを求める心に添って

筑波大学・目白大学　名誉教授　　真仁田　昭

東日本大震災に伴う悲惨な状況の報道が重なるにつれて、世界中から「あなたは一人じゃない」という励ましが続々と寄せられているという。国内でもそれに倍する声援はなお尽きることがない。そのことで、「一人じゃない」と深く感知した人は、それが力となって一層と前向きな対応を可能としているに違いない。

それは、似たような体験が自分にもあるからだ。

もう何年も前のことになるが、長男に第一子が生まれて間もなく、「この子の胸の血管の結びつきにおかしいところがあり、一年もしたら手術が必要かも」といわれたという。ベッドの上で嫁はただ涙し傍らで息子はオロオロするばかり。叱咤するのもはばかられる有様であった。そして為す術をもたない己に、どれほどの無力を味わったことか。

暗くなって妻と家路を辿るのだが、ふとある医大に小児科教授の知人がいることに気づいた。夜遅く氏と連絡がとれ孫の担当医から告げられた病名を話すと、さすがは「その道の人」、明確にその症状と対応のあり方について教えてくれた。「なるほど、なるほど」と耳を傾けながら、同時にわたしの胸を去来したのは、「これからも二度三度と助言を求めた時、今と同様の親切な応対がもらえるか」ということであった。すると彼はこちらの心を察したかのように、「このことで心配があればなん時でも」といって携帯の番号まで教えてくれたのである。

そのことで、どれほどの安堵を得たことか。「一人じゃないんだ」と思い、心の底から元気が湧き上ってくるのを覚えたのである。「心ある医師」とはこのような医師をいうのかと思ったことでもあった。

過日、世田谷区発達障害相談・療育センター「げんき」の相談・療育担当者との顔合わせの折、「道連れ」たることこそ課題と思い、そのことを念頭に「お遍路」の話をした。札所を巡るその旅では身にまとう白衣や手にする杖には、弘法大師の尊称である「南無大師遍照金剛」と「同行二人」の言葉が必ずといってよいほど書かれている。杖を大師に見立て弘法様を道連れとしての旅との思いを深くし、そのことで安心と元気を取り戻して心新たな「生き直し」のキッカケにしたいとの願いが秘められているのだ。この旅を「再生の旅」とするのも如何にもではないか。

ところで近ごろは、「金子みすゞ」ブーム。その童謡詩に触れることも多くなった。その名をはじめて知ったのは平成5年。長門の青海島を対岸にする仙崎小学校を訪れた時のことである。受付けの小窓の上に、「大漁」（＊）という題で

朝焼小焼だ大漁だ　大羽鰮（おおばいわし）の大漁だ。
浜は祭りのようだけど　海のなかでは何万の
鰮のとむらいするだろう。

との詩を目にし、「誰の作か」と問うと本校出身の「金子みすゞ」という。

それ以来の彼女とその作品に対する関心であったが、彼女の生誕百年の平成15年に目白大の公開講座の一環として、その作品の「群読」の会を催したことがある。定員400名有余の会場であったが立錐の余地もない盛況ぶりであった。

そのことでその人気の秘密を改めて思うのであるが、そこには無力と孤立を思いそれに伴う動きを、その身になって感知し歌い上げているのだ。その故にその詩に触れることで多くの人が「ホッ」とするからではないかと思うのである。

今日、「一人ではない」、「道連れがいる」、「その身になってくれる人がいる」、それを深く希求する人びとは決して少なくない。その心に応えて共感をベースとした社会づくりこそ現代の課題とみるが、療育担当者はその先達的な役割を担っている。「共感性を高めよう」との挨拶もその故のものであった。

＊『金子みすゞ童謡全集』（ＪＵＬＡ 出版局刊より）

社会福祉援助技術論

社会福祉現場からの訴え　その五

～社会福祉援助者の立ち位置を考える～

石井哲夫

―その30―

『ひと』全体に関わり、その人と同じ立ち位置に立つことから、相互の関係性が進む

この頃の世相の変化に関して、社会福祉の研究者や教育者はどのように考えているかを聞いてみたい。社会福祉の研究者、教育者は、制度政策面と支援法との両面に分かれてきた。

そして、アメリカはじめ諸外国において採用しているマネジメント法を採用し、社会福祉の政策（マクロ）、方法（ミクロ）の両方に関わるメゾとして適切な方法論の提起となってきている。その前段階としてのケースワーク、グループワークそしてコミュニティワークの三方法論に関しては、医学モデルと社会モデルとを組み合わせるソーシャルワークという立ち位置が必要であり、ケアマネジメントというフレーム作りのみでは置き換えられない実践的内容が含まれている。

これは心理学においても人間の心を外側から見られる状況として、対象となる行動（たとえ状況という包括的な概念を用いたとしても）の操作という立ち位置にワーカーが居る限り、この方法論は対象に働きかけるという医学モデルから広げることが困難な操作的概念なのである。

自閉症の子どもへのTEACCHプログラムについても、外部刺激に翻弄されている自閉症の人へ加わる刺激を整理していくという『構造化理論』の効果を認めることが出来るが、療育者としての立ち位置が『外側からコントロールする人』である場合は、一定の範囲を超えることが出来にくいことを指摘しておきたい。

つまり、『ひと』全体に関わり、その人と同じ立ち位置に立つように努力することから、相互の関係性が進むし、その『ひと』の発達が促されることになるからである。外側に立つ限り、自閉症スペクトラムの人たちへの療育効果はあまり期待できないと考える。

『ケアマネジメントで重要なことは本人が参加すること』

このことはあくまでも社会福祉援助論に限定して話していることであり、本人の自己決定とか自発性を尊重しようという立ち位置に立つ必要性が歴史的に重要視されていることを強調するからである。

ケアマネジメントという方法論が導入されてから、今まで、ソーシャルワークとして強調されてきた利用者論が歪曲されやすくなっていることに危機感を感じるものである。

我が国でケアマネジメントを進めてきた第一人者である白澤政和桜美林大学老年学研究科専任教授（元大坂市立大学生活科学部人間福祉学科教授）と、かなり初期の頃この問題について話し合ったことがある。白澤教授が『ケアマネジメントで重要なことは本人が参加すること』と言われたことがあまり広がっていかないと思っている。

本人とのやりとりを重ねながらも、ケアワーカーの立ち位置としては依然として『外部からのコントロール』であることが多い。

『受容』の意義を理解し、利用者と行動を共にする方向で再出発を

最近、高機能自閉症やアスペルガー障害の人に関わる相談が増えてきているが、相談機関にこの人達が失望するのは、本人の内的世界を理解できない相談者が多いことである。ワーカーが本人達の内的世界の理解に努め、ケースワーク、グループワークそしてコミュニティワークの大原則である『受容』の意義を理解することから、利用者と立ち位置を同じにして、行動を共にする方向で再出発を図ってもらいたい。

行動を共にするということは、一緒に悩み、一緒に働き、一緒に安心し、一緒に楽しむことである。勿論、そこから意見を出し合い、考えあい、学び合うことになるのである。

「東日本大震災」支援報告①

今回、東日本大震災の被災地支援に2名の法人職員が携わりました。その報告内容を抜粋して紹介します。

現地調査

(岩手県と宮城県の自閉症児者とその家族の調査)

おおらか学園　森下 尊広

今回私は、(社)日本自閉症協会施設部会派遣員として4月11日から23日までの約2週間、岩手県と宮城県の自閉症児者とその家族を対象に現地調査に行きました。

震災後、両県の自閉症協会から、「生活の変化や人からの働きかけに過敏に反応し、不安を起こしている自閉症の方々がいる」、「避難所で落ち着いて過ごせず、厳しい生活を送る家族がいる」、「施設職員の疲労が日に日に増している」などの情報が入ってきました。

そして3月22日付朝日新聞の記事から、「環境変化や集団生活の不安から、避難所にすら入る事ができない自閉症の方々が沢山いるのではないか？　そうした方々はどう生活しているのだろうか？　どんな支援が組み立てられるだろうか？」と疑問が湧いてきました。しかし、TVや行政から入る情報だけでは実態が見えにくく、現状を把握し必要な手立てを構築するためにも、現地調査をと考えました。

幸い宮城県では、前嬉泉職員の宮城学院女子大学発達臨床学科白石雅一教授を介し、宮城県発達障害者支援センター「えくぼ」や、宮城県自閉症協会と連絡がとれました。岩手県では、全国自閉症者施設協議会会員施設の社会福祉法人フレンドシップいわて・虹の家に活動拠点を置き、岩手県自閉症協会の協力を得る事ができました。

現地では、自閉症協会会員の安否確認と、自閉症児者とその家族を対象に、入所・通所施設の状況、避難所での生活の様子、在宅での生活の様子について調査を行いました。

そこには、地震や津波から逃れたものの、次の問題に追い込まれ、必死に生きようとするご家族の姿がありました。家を津波で流され祖父母との共同生活が始まったご家族は、限られた物資を三世代で分け合っていました。ライフラインが止まり、震災前とは違う生活の中で新たなこだわり行動が現れた方たちもいました。また、先々の不安から保護者のストレスが溜まり、普段であれば気にもとめない子どものこだわり行動が目につき、虐待に発展する恐れのあるご家族もありました。精神的な疲労感、経済的な面で身動きが取れず、三重苦、四重苦を抱えるご家族もありました。

避難所では、目で見て分かりやすい障害の方は、周囲の理解も得られやすく、比較的早い段階で必要な介助や配慮を受けることができていました。しかし、目で見て分かりにくく、理解する為にコツが必要となる自閉症の方々は、特性が理解されにくく、支援が上手く届かず本当に困っていたのです。自閉症の障害特性を知る人が多くいれば、例えば個別の場所やパーテーションの確保など、必要な支援がいち早く提供されたと思います。

もちろん、自閉症児者の関係団体では支援システムを作っているところもありましたが、今回の震災はその想定を遙かに超え、上手く機能できなかったと感じました。

現地のニーズは刻々と変化しています。現地情報を収集し、「Aさんにはこういう本やDVDが必要」という個々のニーズに合わせた、ピンポイント支援が長期に行える体制作りが必要と感じています。

今回の調査を終え、今後早急に取り組んでおくべき事として、例えば、①「世界自閉症啓発デーのイベントにおいて、全国各地で自閉症児者の方々が避難生活をイメージできるような合同避難訓練の実施」②「障害特性に応じた避難所の設置」といったことを考えました。特に②については、医療機関や専門機関がピンポイントで支援に入ることができ、同じ境遇の家族が集まっていることで疲労感にも違いが出ると考えます。セーフティーネットとして、入所施設のショートステイサービスの利用も有効です。また、災害時に、自閉症児者施設自体が自閉症児者とその家族を優先的に受け入れる「福祉避難所」となるよう行政に働きかけていくなど、自閉症児者

に対する災害支援システムの構築と積極的な啓発活動が必要だと感じました。

今後、人と人とのつながり、地域と施設の共生社会が再生できることを信じています。

「東日本大震災」支援報告②

施設への派遣支援

（鴨川青年の家での支援）

袖ケ浦ひかりの学園　竹田　富義

平成23年5月31日から6月7日の8日間、千葉県立鴨川青年の家にて、福島県社会福祉事業協会が運営管理する入所更生施設へ支援に行きました。

この支援は、千葉県知的障害者福祉協会としての取り組みで、1週毎に6～10名の協会加盟施設職員が、交代で支援に当たっているものです。

福島から千葉へ

「鴨川青年の家」には、福島県社会福祉事業協会が運営管理する各施設の300名ほどの利用者が避難生活をしていました。

どの団体も職員不足で、私が配属された施設では、それまでの半数の職員で、休憩なしでの12時間勤務を続け、夜勤は月8日という過酷な状況にありました。

施設の状況

利用者は、知的障害の方が中心で、自閉症の特性がある利用者は約1割。支援の難しい存在となってはいましたが、作業的な態度や能力は高い印象を持ちました。

この時の鴨川での生活は、日中活動の設定が難しく、日々ご飯を食べて寝ることが中心となっていました。

施設には千葉県から5名、群馬県から1名の計6名が派遣職員として入りました。施設職員の、生活支援（食事や歯磨き、髭剃り、着替え、排便処理など）と安全管理の手伝い、掃除や洗濯が主な仕事です。

特にトイレ掃除と汚れ物の洗濯は大変な仕事で、日々かなりの時間と人手を要しました。少ないトイレを他の団体と一緒に使うため、汚れは酷く日に何度も掃除が必要でした。また、洗濯機も他の団体と一緒に使うため、洗濯機の順番取りや洗濯物を干す場所の確保など、1日中洗濯をしているという状況でした。利用者の衣類も支援物資に頼っているため非常に少なく、雨の日などは離れたコインランドリーまで行って乾燥させなければ衣類が不足する状況でした。

作業の提供から見えてきたこと

派遣先には、袖ケ浦ひかりの学園から簡易作業を持参していました。2日目に入って利用者と行う提案をし、これが3日目に実現しました。作業の手はずは即席で整えたものでしたが、全員が狭いスペースに集まり、施設の利用者だけでなく、他の施設の利用者も参加し始めました。

何かにとりつかれたような取り組みで、1時間半ほどで1箱1万本のスプーンの袋出し作業を終えました。その日の午後にも取り組み、施設長が利用者の取り組む姿や作業量を見て驚いていました。

翌日は、派遣職員が掃除や洗濯を早めに終らせ、午前中に時間を作って作業に取り組みました。避難生活の中で、落ち着いて過ごしにくい利用者もこの作業に集中して取り組む様子が見られるようになりました。ここで初めて、派遣職員と施設職員が交代で休憩を取れるようになりました。

最終日までに10箱をこなし、「こんなに長くできる作業とは思わなかった。久し振りの作業、やることがなくて皆が飢えていたんでしょうね。」という感想を頂きました。

派遣を終えて

大変厳しい状況での仕事でしたが、経験のある他の支援員との交流を含め、チームワークを発揮することができました。

また、過酷な勤務が続いていた派遣先の職員に少しでも休憩を取ってもらえるようになったことだけでも、行った甲斐があったと思います。

嬉泉トピックス

◆嬉泉バザーのご案内

今年度も以下の日程及び場所で、バザーを開催致します。例年通りの企画に加え、ご来場される皆さまに楽しんで頂けるよう、職員一同準備をしております。懐かしい人に再会する機会になることを願いつつ、皆さまのご来場をお待ちしております。

・世田谷…第47回嬉泉バザー
日時　平成23年10月23日（日）
午前10時～午後3時
於　子どもの生活研究所
・袖ケ浦…第34回嬉泉祭りバザー
日時　平成24年2月26日（日）
午前10時～午後3時
於　嬉泉福祉交流センター（袖ケ浦）

◆自閉症実践療育セミナー

「第28回自閉症実践療育セミナー」を開催致します。今回のテーマは、『自閉症の人への支援実践～人へ関わる力を育てる～』です。

午前は、ケーススタディとして臨床児童精神医学研究所所長である山崎晃資先生をコーディネーターに迎え、「通所施設における行動障害への取り組み」と題した、おおらか学園の実践報告をします。

午後は、「自閉症の人に関わる支援者としての自分に気づく」と題して、石井所長が実際のサイコドラマによる実践講座を行います。

・日時　平成23年11月26日（土）
午前10時～午後4時30分
於　霞ヶ関ビルディング1階プラザホール（定員100名）
参加費　1万円、要予約。
申込　子どもの生活研究所
（Tel 03-3426-2323
Fax 03-3706-7242
セミナー事務局担当…樋口・谷田）

◆真仁田昭先生、講演会

7月22日（木）に、嬉泉福祉交流センターの研修棟にて、袖ケ浦の3事業所も加盟している袖ケ浦市社会福祉施設等連絡協議会（以下施設連協）主催の研修会が開催されました。講師には、今回の嬉泉新聞巻頭言もお願いしている真仁田昭先生をお迎えし、『つながりを求める心　～その心に答える～』というテーマでご講演を頂きました。

当日は施設連協加盟施設の職員40名程が参加し、実りある研修会になりました。

※袖ケ浦市社会福祉施設等連絡協議会は、種別に関わらず、袖ケ浦市の児童、高齢、障害、関係団体等が加盟し、袖ケ浦市の福祉の増進に寄与する協議会です。

◆今後の嬉泉新聞について

これまで、「私たちのしごと、世田谷・赤塚・袖ケ浦からの発信」と題して掲載していた各事業所からの活動紹介は、今後法人ホームページにて行っていくことにしました。

嬉泉新聞では、今号から「嬉泉の取り組み」と題して、法人内外に伝えたい現場の実践を各事業所の広報担当が協力し、企画・掲載していきます。どうぞよろしくお願い致します。

（担当…佐瀬、大岡）

平成22年度　社会福祉法人嬉泉
寄付者名簿（敬称略・順不同）

田中吉男・笠松敦子・茂木勝衛
井出正代・田中瑛也・浜之園利夫
松井吉弥・黒林美江・齋藤かつこ
船曳由美・工藤正路・小山裕太郎
大山勝地・済田順子・武藤百合子
真仁田昭・高田昇一・片桐一平
高橋清子・菅原収三・荒井恒夫
山岸陽子・竹原直幸・岸本仙松
納土郁子・田村聰達・時永康男
平瀬邦子・竹原直幸・山田美和子
二木俊彦・遠藤良治・下田明彦
福屋真美・稲垣松男・前田伊佐子
早瀬進・滝本正・吉原貞・湯浅正
舘裕・土谷新・八部一同
花みずき・双葉鮨・桜丘町会
タカハシ金型サービス　高橋健司
篠ヶ谷戸町会会長　春日實
㈱トーヨー建設　代表取締役
岡田吉充・梶山町会会長　中田明
千歳丘教会・五十嵐畳店
㈲米のたむら・㈲伊藤良一商店
瑞穂工業技術研究所
袖ケ浦市社会福祉協議会
ひかりのと共に歩む会
嬉泉後援会

以上の皆様に
厚く御礼申し上げます。
（理事長他役員一同）

新企画 紹介 嬉泉の取り組み

ミニ・ワーク

東京都発達障害者支援センター（通称：トスカ）

社会福祉法人嬉泉では、昭和41年の設立以来、発達障害児・者、特に自閉症の人たちへの支援の取り組みを展開してきました。障害でみるのではなく、人格と自発性を尊重し、本人の立場に立ってその生きにくさを理解し、発達支援や社会的なリハビリテーションだけでなく、社会のなかで安心して生活できる居場所の確保や理解者を増やすために様々な取り組みをしてきました。

この度、その具体的な取り組みを紹介する新企画をスタートすることにしました。第1回は、東京都発達障害者支援センター（通称…トスカ）での、成人期支援のあり方について根本的に発想転換した「ミニ・ワーク」について紹介します。石橋悦子同センター主任支援員に話を聞きました。

―さっそくですが、ミニ・ワークってなんですか？　どんなことをするのですか？

簡単にいえば、発達障害のある本人たちに安心出来る居場所としての働く場を提供し、就労を含めた社会参加につなげていくものです。法人本部から徒歩1分のところにあるビルの1階に部屋を借り、事務的作業を中心に行っています。

―考えられた経緯を教えてください。

トスカの相談事例において、就労の意欲はありながらも、就職できない、或いは就労継続できず家庭外の行き場がない。結果的に社会から孤立した生活が長期にわたっているという人が大変多かったのです。

この場合、相談面接だけでは就労困難の実態が具体的に把握しにくいことや、本人の困難性が明らかになったとしても、その後、支援のための受け皿がないため、再び地域の中で孤立してしまうことになりがちです。つまり、相談をしても、本人にとって具体的な生活改善の方向に進んでいかないのです。そのため、何とかしなければ、という気持ちが年ごとに強くなっていきました。

成人期支援に関する試行事業はこれまでも取り組んできましたが、「働く」ことを実行出来る場が有効であると考えるようになりました。というのは、平成20～21年度に東京都の委託事業として法人が実施した「発達障害相談における困難事例検証事業」の実績からなのです。この事業は、袖ケ浦の施設を利用して、本人たちに「働く」体験が出来るようにしました。この「働く」場面を通して経験した新しい関わりが、以前の膠着化した本人や家族の生活構造を変えるきっかけになることを実感出来たのです。

そこで、就労を含めた社会参加が難しく家庭外に行き場もない、という人への取り組みの一つとして、本人にとって安心出来る「働く場」を提供したいと考えました。しかし、トスカ事業として、そのための場と人の確保は到底無理なことであり、法人常務理事でありトスカのセンター長でもある石井所長に相談し、法人からの全面協力を得て、平成21年の夏から始めました。この時点で3名の利用がありました。

そして、このミニ・ワークの実績をふまえ、平成22年度に都の委託を受け「発達障害者社会参加支援普及事業」を実施したというものです。

―何がいままでの就労支援と違うのでしょうか？

ミニ・ワークで考えたことは、「社会の基準に合わせた『働く』」というのではなく、「発達障害がある本人に合わせた『働く』場にしたいということです。社会基準に合わせることを優先すると、どうしても「出来なさ」のみが強調されやすく、果てしない努力を本人に求め続けることになります。ミニ・ワークでは「働く」という現実場面を通して、本人が自分を知り、同時に人と関わる経験が出来ることを大事にしました。

東京都発達障害者支援センター（通称トスカ）について

東京都発達障害者支援センターは、国の補助を受けて東京都が実施するもので、具体的な運営は、社会福祉法人嬉泉が東京都から委託を受け平成15年1月に開設しました。（当初の名称は、自閉症・発達障害支援センター）

発達障害者支援センターとは自閉症などの発達障害の人とそのご家族が、安心した暮らしを営むことができるよう、その総合的支援を行う地域の拠点として、平成14年度より国の新施策として発足しました。平成17年4月に施行された「発達障害者支援法」により位置づけられた専門機関です。

利用対象は、東京都在住で、発達障害（自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害など）の本人とその家族、医療や教育、福祉、あるいは行政機関など、関係する全ての人が対象となります。

大きく分けて4つのサービスを行なっています。

① 本人および家族に対する直接支援（来所或いは電話による面接相談）
② 情報提供および他機関との連携
③ 関係調整・コンサルテーション
④ 普及啓発・研修

ミニ・ワーク　参加者の声①

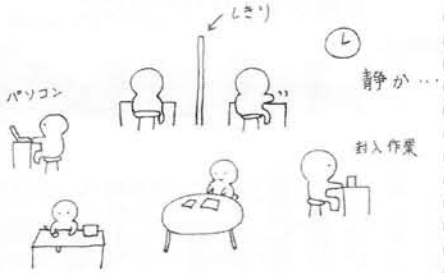
※イラスト、文章ともにAさんによる

障害者作業所といえば
　共同作業が多い
　人と関わりながら社会に出る
　準備をする
　刺激が多い

地元の障害者福祉センターの紹介で
　「発達障害者支援センター就労支援モデル事業」に参加
　成人の高機能広汎性発達障害者対象

発達障害者就労支援は
・個別作業
・少人数（7〜8名）
・他の利用者と無理に合わせる必要なし
・自分の能力に合わせて好きな作業が選べる
・毎日ではなく週2日13:00〜16:00の作業
　無理のないペースで働くことができる

キレイなマンションの一室。
作業所というよりオフィス。



他の人との刺激がないように机の配置など工夫されている。
これは当事者にとって嬉しい配慮。

ミニ・ワーク　参加者の声②

【Bさん】…家にいるときはあまり動かなかったので、ひきこもりのような状態でテレビをずっと見ていました。社会参加の準備として役立つと思います。

【Cさん】…ミニ・ワークは、自分がどういう人間かを知る場所。周りの人を見て鏡をみている感じ。「あ、こうだったんだな」と自分からみて気づくという経験をしています。

【Dさん】…生活のリズムがちょっと変わった気がします。起きる時間、寝る時間を前の日はミニ・ワークに合わせる。あと、家に帰って親とか、家族に今日やったことを話すことが増えました。お金が入るということで、一生懸命やろうと思えます。

発達障害者社会参加支援普及事業　事業実施報告書（東京都福祉保健局障害者施策推進部精神保健・医療課発行）より一部抜粋

―では、具体的な内容を教えてください。まず、どんな方たちが利用されていますか？

平成22年度に実施した事業において、参加対象は、トスカの相談を利用した人のうち、アスペルガー症候群など高機能の自閉症スペクトラム障害の診断を受けている、年齢は19歳〜40歳代、さらに今回は、家族の協力が得られる人、ということにしました。週に2回（火、木）午後3時間です。延べ100回実施しました。作業内容は、事務作業、パソコン入力、清掃作業、マスクの検品と箱詰めなど。作業内容をリスト化し、自分で選んでもらうようにしました。

―利用された方たちの反応や感想は？

本人や家族から、さまざまに感想が寄せられました。この紙面でその一部を紹介します。あらためて、このような新しい発想による行き場の確保が必要と思いました。

―他の機関でもできますか？

都の委託事業の実施目的として、「区市町村や他の支援機関への普及」があり、実際に関係者の見学や意見交換を行いました。支援関係者の立場からは、「発達障害は同じ診断名でも、それぞれの支援ニーズが異なり、支援しにくい」、「従来の障害者支援のノウハウが活かしにくく、既存の支援機関での受け入れが難しい」という声がきかれました。

確かに、発達障害という一括りでの対応は難しく、さらには有期限のプログラムで数字の上での成果を求められるような支援を想定することは難しいかもしれません。

支援に関わる側が、社会参加支援の内容を柔軟にとらえ、本人たちの安心出来る居場所とするための取り組みを試行できるとよいと思います。それと、支援に関わるスタッフが、発達障害の中でも自閉症の人への支援経験があるとよいかもしれません。

最初は、今回、トスカが実施したように、対象の人をある程度限定したかたちで始めるといいと思います。

―次号もミニ・ワークについて取り上げます。

VOICE ～響き逢い～

『ひかりの旅行』

伊藤 訓育

平成22年10月6日に親子旅行の、群馬県伊香保温泉に、行きました。

ホテルでぼくのお誕生日でした、45回目のお誕生日でした。

初日は、足利フラワーパークへ行きました、開通目前北関東自動車全線開通前でした、渋川市のコンビニで、ぼくのお誕生日用の、ケーキを、もらいました。

その日は、初日アクアラインから、首都高へ、のりました。

群馬サファリパークにて

群馬県の伊香保温泉に、泊まりました。

お誕生日プレゼントとして、職員森さんと、工藤さん（ひかりの学園利用者）から、ケーキプレゼントを、もらいました。

二日目は、りんご園へ行き、その後、群馬サファリパークへ、行きました。

ライオンとか、ぞうを見ました。

上信越道は、長野や北信越方面へのバイパスです。

伊香保ホテルで、地元の群馬テレビがうつります。

初日に、いった栃木県佐野足利インターで、おりました。

3月19日に、開通する北関東自動車3県に、またがります。

地元群馬県は、伊香保付近には、草津方面への道路があります。

ホテルで、ハッピーバースデーテュウと、言いました。

（ひかりの学園利用者）

『フォートでの食事』

飯田 真奈子

昨年度の四月から、私達グループホームの人達は、火、水、金の三日間、フォートで夕食を食べました。

以前は、学園から食事を運んで食べて、私は毎日、お部屋で、一人で食べていました。

しかし、フォートで食事をする様になって、良かったのは、毎日、先生を始め、皆と一緒に、語らい合いながら、楽しく食事が出来る事です。

そして、何よりも一番良いのが、出来たての、温かい食事が食べられることです。

学園から運んだ食事は冷めてしまい、温かいと美味しい物が、冷たくなって、がまんしながら、食べました。

食事を作って下さる、村田先生は、本当にお料理が上手です。

私が仕事から帰って来ると、フォートから、いつも、良い香りがして、お腹が鳴ります。

今日のメニューは何かな、といつも楽しみになります。

日替わりで、肉、魚といった感じで、いつも大ごちそうです。又、フォートで食事をすると、小さいレストラン、及び、ペンションの食堂で食べている感じで、とても良い雰囲気です。

自分のお部屋で一人で食べるより、ずっといいです。

来年度も。フォートでの食事は、続けて欲しいと思います。

（グループホーム春のひかり住人）

フォートでの食事

※本人の原稿を尊重し、出来る限り、文章校正は控えています。

＊「ひかりのタイムズ」は、今号より「VOICE」と名称を変更しました。今後は、ひかりの学園利用者だけでなく、法人内事業所に関係する本人や家族、さらには関係者の声をお届けしたいと思っています。